

合評会：笹川裕史『中国戦時秩序の生成 ：戦争と社会変容 一九三〇～五〇年代』

はじめに

1. 以下は広島中国近代史研究会の第 196 回例会として、2024 年 12 月 7 日（土）午後 2 時 30 分から広島大学霞キャンパスで開催された笹川裕史『中国戦時秩序の生成 戦争と社会変容 一九三〇～五〇年代』（汲古書院、2023 年）の合評会の記録である。
2. 報告者は丸田孝志（広島大学）である。報告の内容は、書評原稿として『史学研究』第 322 号（2025 年 9 月刊行予定）に掲載予定であり、本誌には、討論部分と報告レジュメを収録した。
3. 録音は李芸さん（広島大学(当時)）、徐茂嘉さん（広島大学大学院博士課程後期）の助力を得た。
4. 笹川裕史『中国戦時秩序の生成』については、中国基層社会史研究会が 2024 年 9 月 8 日（日）に上智大学四谷キャンパスで書評研究会を開いた。報告者は三品英憲さん（和歌山大学）と大澤武彦さん（国立公文書館）である。
5. 2025 年 5 月 1 日現在、書評としては三品英憲さん（和歌山大学）（『上智史学』第 69 号、2024 年）、大澤武彦さん（国立公文書館）（『中国研究月報』第 79 巻第 1 号、2025 年）がある。

金子肇(以下、金子) 司会を務めます広島大学の金子です。本日はわざわざ遠方からもたくさんの方が来られていますので、非常に賑やかで活発な討論を期待しています。まず丸田先生に書評を 35 分くらい報告いただいて、次に笹川さんから 25 分くらいの時間でリプライをお願いします。その後、少し休憩を取りまして、それから全体討論を 90 分ばかり予定しておりますので、様々な角度からご議論いただけたらと思います。それでは早速始めることにしましょう。では、丸田さん、お願いします。

丸田孝志(以下、丸田) はい、広島大学の丸田です。本日は笹川さんのご著書、『中国戦時秩序の生成』、1930 年代から 50 年代にかけての中国の戦時動員と社会変容に関わるご研究についての書評報告をさせていただきます。レジュメは事前にお配りしております。それに即してほぼそれを読み上げる形で進めていきたいと思っています。

(報告内容については、以下の参考資料(レジュメ)を参照)

【参考資料】

2024年12月7日
中国近代史研究会第196回例会
広島大学霞キャンパス

書評 笹川裕史『中国戦時秩序の生成：戦争と社会変容 一九三〇～五〇年代』汲古書院、2023年

丸田孝志
(広島大学人間社会学研究科)

はじめに

- ・著者 国民政府の土地行政史の研究を皮切りに、長年にわたり20世紀中国の政治と社会の関係を、特に戦時動員と社会変容を中心として検討してきた研究者
- ・学術的啓蒙書(共著・単著)
 - ・笹川裕史・奥村哲『銃後の中国社会―日中戦争からの総動員と農村』岩波書店、2007年
 - ・笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』講談社選書メチエ、2011年
- ・編著 基層社会史研究会 比較の視点に立つ戦時動員の中の政治・社会史
 - ・笹川裕史編『戦時秩序に巣食う「声」―日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017年
 - ・笹川裕史編『現地資料が語る基層社会像―20世紀中葉 東アジアの戦争と戦後』汲古書院、2020年
- ・本書 既刊の二冊の学術的啓蒙書の基礎となった実証論文とその後の論文を収録
専門的な見地から著者の研究の到達点を示そうとしたもの

I. 本書の内容

序章 本書の問題意識と刊行の動機、本書の構成

- ・本書の課題
 - ・前世紀の「古色蒼然」たる侵略戦争の姿を再現したウクライナ戦争の衝撃
戦争がウクライナ社会とロシア社会にもたらす長期的な変容に思いを致し
～このような「厄介な問題」を中国という先例に即して明らかにすること
- ・「戦争と社会変容」～20世紀の先進的な欧米諸国や日本を主な題材として議論されてきた
- ・中国を対象とする意義
国民国家としての成熟を経ないまま、総力戦の論理にさらされ続けた中国で何が起こっていたのかを
観察できれば、総力戦体制をより広がりのある普遍的な視野の中で捉え直すことができる
- ・「戦時秩序」「戦時体制に生命を与え、これを下から支える固有の社会秩序」
その生成が矛盾と葛藤に満ちた過程を辿り、戦時動員体制の解除後も長く人々の行動様式や意識構造に
深く根を下ろしていく

第一部 食糧と兵士の戦時徴発―管理社会化への道程

日中戦争から中華人民共和国の誕生を経て、「戦時秩序」が社会を覆っていく過程

第一章 日中戦争期の戦時徴発と社会変容―戦時秩序生成に関する序論的考察

- ・日中戦争期の四川省における徴兵と食糧徴発
末端行政の脆弱さと社会の組織性の弱さにより、様々な不正と深刻な不公正が引き起こされる
- ・日中戦争末期 地方レベルの民意機関の設置
不公平な負担の是正を求める請願や不正行為に対する告発が頻発 地域社会に一定の組織性

第二章 日中戦争期の戦時食糧政策の執行過程と地域社会

- ・日中戦争期の四川省における食糧徴発の実態
中央政府の統一基準は各省において厳格な拘束力を持たず、
四川省：清朝の中葉から末期にかけて堆積した矛盾をそのまま継承
末端の税負担において弊害が噴出 各地の不公平感や地域間の反目
食料は運搬、保管の過程において事故や汚職などで多くが失われる
国民党、三民主義青年団から憲兵まで動員した強権的な体制により一定の成果

第三章 食糧の徴発からみた一九四九年革命の位置

- ・食糧徴発政策の視角から 1949 年革命の歴史的な位置を考察
国民政府と共和国の食糧徴発政策 体制やイデオロギーの相違にも関わらず、
政策、課題、政策志向において強い連続性
49 年革命を境に、政策の精緻化・農村社会掌握の徹底・強制機構の動員強化・農村有力者の既得権廃絶
など、国民政府が実現できなかった諸条件が急速に整えられ、
53 年～農業税＋計画買付額 国民政府時期の 4.3～5.4 倍という飛躍的な徴発量を達成

第四章 戦時災害リスクの構造と管理社会化

- ・日中戦争期の四川省：戦時動員が自然災害を誘発 災害が戦時動員の機能を失わせる
- ・国民政府時期 管理統制の緩やかさと住民負担の不公平性が結びつく
- ・共和国時期 管理統制が徹底 「緩衝空間」や「逃げ場」を奪われた社会の構造的な病理が災害
を引き起こすようになる ～管理社会化の功罪

第二部 せめぎあう徴兵と社会——同調圧力の技法と閉塞状況

徴兵制の実施と社会とのせめぎ合い

第五章 日中戦争期の知識青年従軍運動——抗日ナショナリズムの光と影

- ・日中戦争末期の国民政府統治地区：知識青年従軍運動
- ・第一期の運動 インド・ビルマルート再開を目指す米軍の要請に呼応した学生ら
- ・第二期の運動 大陸打通作戦に対抗するために組織
国民党・三民主義青年団に属する適齢者を強制的に動員
青年ら 愛国の情熱に突き動かされながらも、兵営生活に幻滅し逃亡することも
戦後は職場や地域社会で秩序維持や反共活動の担い手
数万人が共和国成立後に粛清 共産党側につく者、台湾に逃れる者など

第六章 戦後内戦期の徴兵制導入と都市社会

- ・中国最大の経済都市上海 戦後国共内戦期の徴兵制導入の問題
流動性の高い都市において住民の管理把握は困難
- ・工場組織 生産のための労働力保護を盾に兵役負担を合法的に忌避
- ・住民ら 時に暴力を行使して徴兵に抵抗
- ・末端行政 壮丁の拉致や売買、名簿の偽造などの逸脱行為が蔓延
- ・政府 志願兵の募集によって急場をしのぐ
困窮する過剰人口が悪質なブローカーを通じて送り込まれ、騒動や逃走が頻発
～軍隊の士気や紀律を内部から掘り崩す

第七章 人民共和国初期の義務兵役制と都市の青年たち

- ・1955年 共和国の義務兵役制の上海における実施状況
徴兵を拉致と捉える国民政府時期の記憶 社会に根強い不信感
無職の青年や私企業職員など前途に不安を持つ階層 転機を求めて積極的に応召
- ・脱法行為による「逃げ場」が消失しつつあり、
愛国主義教育の拡大、管理社会化の進展を背景にノルマを順調に達成

第八章 人民共和国初期の義務兵役制と農村社会

- ・農村幹部ら ノルマに対する過度の楽観や悲観の態度
露骨な利益誘導や暴力、強制的な手段、不適格者が意図的に送り込まれる
- ・貧しい生活からの脱却を図る者が積極的に応召
- ・生命や生活への懸念から兵役を逃れようとする者 逃亡、身体への毀損、年齢詐称、分家、養子縁組など
 - ・モデル地区 幹部や大衆による組織的な説得教育工作
相互監視や同調圧力が強く作用する環境が急速に整えられていく

第三部 社会のなかの兵役負担者たち——新たな権利主体の戦時戦後経験

出征兵士家族や復員兵士など兵役負担者に対する社会、国家の対応から、戦時秩序の生成を考察

第九章 日中戦争期の出征兵士家族援護と社会変容

- ・出征兵士家族に対する優待制度の整備
兵士の家族ら 社会的支援を受ける権利があるという意識が浸透 ～優待不履行に対する抗議が頻発
- ・権利を踏みにじり私腹を肥やす末端行政職員や小作契約を解除しようとする地主らに対する社会の敵意
～戦後の共産党による富裕者を標的とした土地改革などの諸政策が受容される社会基盤を準備

第一〇章 戦後内戦期の兵役負担者と地域社会

- ・戦後国共内戦期 復員兵士および出征兵士家族に対する社会的支援の状況
中央政府から支給されるべき留守宅一時金 ～財源不足で執行が滞り地方政府に移管
家族への「優待殺」～横領されたり、受給資格者の管理が不十分、不適格者にも支給
- ・内戦末期 事態打開のため、「安家費」に代わって
 - ・「戦土授田」政策 入営者とその家族に直接土地を支給する
 - ・「限田」政策 土地所有に制限を設ける を立案
～四川省：いずれも未実施、兵士家族の生活を支える規律が社会に形成されず

第十一章 朝鮮戦争期の兵役負担者援護——農村の場合

- ・朝鮮戦争期の四川省西南部地区：兵役負担者の援護政策
土地改革で没収された地主・富農の土地・財産を財源に援護政策は軌道に乗る
権力は兵役負担者に名誉を与えながら、教育や大衆動員を通じて、権利意識の自由な表出を抑制
- ・代耕工作における不公平解消のため、作業量を点数化した「工数」の導入
朝鮮戦争を支える農業生産の維持という国家的要請 代耕工作の制度化、システム化が進展
～総動員体制の構築 全ての農作業を労働点数によって管理する農業集団化へ

第一二章 復員兵士たちの戦後経験——都市の場合

- ・1950年代の上海：復員兵士の戦後体験
元兵士ら 国家によって定式化され社会にも共有された「英雄」の表象を担う
努力により労働模範となる者／傲慢な態度により周囲から孤立する者
大規模な戦争を想定して、急速な工業発展を目指す当時の国家的要請

元兵士らの生産労働の忌避には極めて厳しい視線
低い技術水準の下で極端な労働強化に依存せざるを得ない環境に置かれる

第四部 戦時の社会動態と政治文化——中国戦時秩序の諸相

補論 第一部～第三部で明らかにした史実を再構成
戦争がその後の中国にもたらした変化や歪みをテーマごとに再論

第一三章 日本との比較からみた戦時社会支援事業——総力戦と基層社会

- ・戦時下の日本社会との比較、総力戦と国際緊張の下で生じた中国基層社会の変化の特徴を再考
- ・戦時下の日本社会の動向との類似性 同時代よりもむしろ共和国成立初期の政策の中に見出せる
戦時徴発の危機を緩和し、負担の公平性を狙った国民政府の諸政策

～共和国成立初期においてより高い実効性を伴って改めて実施

中国の代耕工作与日本の勤労奉仕の比較

基層社会の住民全体を巻き込む均質なシステム化が目指され、個々の住民が自主的に取り
結んでいた私的な社会紐帯が公的な規律の浸透を阻む障害として捉え直されていく

第一四章 農村社会と政治文化——近代化、戦争、革命

- ・清末～共和国成立初期の末端行政 近代化、戦争、革命の過程の中での変容
民意表出や合意調達のあり方にも留意しつつ分析
- ・伝統的な王朝の専制支配の構造 末端行政の粗放さと非公式な下意上達の軌道
近代化の過程 膨大な財政需要を支え、公正な税負担を実現するために変容を迫られ、
厳密な社会の掌握と国民意識の形成が求められていく
日中戦争以後 膨れ上がる戦時徴発 末端行政職員が苛烈な収奪、私腹を肥やす
民選を開始した各級参議会を通じた抵抗が活発化
～地域ごとにぶつかり合う民意が合理的に調整される契機を欠いたまま、
富裕者への敵意が増幅され秩序は崩壊へ
共和国 上意のみに従い収奪を強化する末端行政機関が継承され、民意を基に合意形成を図る
政治文化は根付かず、大衆動員によって「民意」を操作する中共の政治文化が出現

第一五章 戦争と「民意」のゆくえ

- ・戦後内戦期の最終段階 民意や民主主義の意味内容が変質～今日の中国の政治文化が生み出される
民意の表出 ジャーナリズム、行政機関への請願・陳情、法院(裁判所)への提訴など
四川省の各級議会 日中戦争期から戦後にかけて民選の形式を整える
中央からの負担強制に抵抗を繰り返し、負担を公平に分ち合う方策を模索 社会の支持
内戦の深刻化の中で議会は機能不全に
内戦末期 社会秩序の崩壊に伴い富裕層を敵視する世論が激化 議員らも批判の対象
～中共が操作可能な階級性を問題とする敵意が立ち上がっていく

II. 本書の意義・学んだこと

①20世紀中国における戦時動員の歴史的固有性とその特徴の指摘

- ・日中戦争期から朝鮮戦争期までを一連の流れとして捉え、イデオロギーや体制の相違を超えて一貫して続く社会変容を基層社会の動向に焦点を当て明らかにしたもの
- ・日本の戦時動員体制との比較によって中国の特質を確認する
- ・中国の特徴に関心を払いつつも、歴史的に形成されてきた当該時点での中国社会の固有性や固有の政治状況、国際環境に着目 ～構造論的あるいは文化決定論的な中国の特性を論じようとしたものではない

- ・先進国を対象に議論されてきた総力戦体制を、より普遍的な視野の中で捉え直す
～戦争と社会変容に関する議論をより豊かにする意図
- ・「政治文化」の問題(第一章)
末端行政の粗放さと非公式の下意上達の「軌道」という近代化を阻害する要因を克服した帰結
～様々な要因に規定され、多様な可能性
民意の表出が合理的に調整される新たな政治文化が胎動した可能性
共和国期の末端行政だけが唯一の宿命的な帰結ではない
～日中戦争以降の政治と社会の混乱が中国に及ぼした負の影響が強く認識される
現代中国の政治と社会の異質さが、抜きがたい本質的なものとして殊更強調される傾向のある今日、
問題の一部が本書が扱う歴史的経緯に起因することを理解しておく意義
- ・暴力や破壊などの目に見えやすい被害に留まらない、戦争がもたらす長期的な負の影響
- ・苦難に満ちた庶民の歴史経験 中共の示す硬直した政治社会認識と異なる、
中国社会のしたたかさや柔軟さが将来にわたり継承されていくことを示唆

②戦時動員における民意の形成とその可能性についての指摘

- ・国民政府 厳しい戦時動員の状況においても各級民意機関の創設を推進
民意機関：地域の利益を代弁して抵抗を組織 「草の根民主主義」の萌芽
本書の議論 地域の利害の表出～互いの対立 利害を調整する公的組織の形成までには至らないものの、
総力戦が平等な負担を社会に強いる以上、犠牲を払った人々の権利意識を喚起
民意への配慮を欠いては動員の質を高めることができないという総力戦の論理が貫徹
～国家を危機と崩壊の瀬戸際に追い詰める総力戦 国民統合の契機を提供
／国民参政会 地域や諸集団の利害を反映 国防委員会や行政院を動かす諮問機関以上の役割^①
日中戦争期以降の民意を政治に反映させて利害を調整する政治機構構築の試みとその運用の実態
～もう一つの「政治文化」成立の可能性 更に探究される必要

③長期的な視点による中共政権成立過程の解明

- ・近代国家による社会の最末端までの統治
基層幹部 忠実な国家の代理人としての活動+被統治者の自発的服従を獲得できる社会の代表性が必要^②
- ・本書 過酷な戦時動員の中で、社会の利益を代表せず、政府の代理人として収奪を強化する基層幹部
社会を破綻に追い込みかねない危険な状況が生まれる
代表性を持たない者の極限までの収奪
戦時動員・階級闘争 ～極端な暴力を背景とした、操作性の高い大衆運動が支える
／治安の悪化に伴い叢生した武装集団や復員兵 民兵に組織されて基層の暴力装置として機能^③
本書 戦時動員と秩序の混乱がもたらす暴力的で強い収奪力を持つ中共権力の成立過程
日中戦争以来の長期的な歴史の中に位置付けて実証的に明らかにし、20 世紀中国の政治と社会の変容
の方向性を総合的に把握することに成功

^① 呂程「日中戦争下中国における「民意」の表出と行政 国民参政会・国防最高委員会・行政院の関係」『史学研究』317号、2024年。

^② 角崎信也「中国共産党の農村「国家建設」 黒竜江省における村級人民代表会議制度建設と農村「三反」1948～53年」『社会科学研究』第73巻1号、2022年、45～46頁。

^③ 高曉彦「中華人民共和国建国初期における民兵制度の形成 貴州省東北部の事例を中心に」『アジア研究』第68巻第1号、2020年。

Ⅲ. 若干の疑問点・コメント

①地域の凝集力と地域エゴ

- ・前共著『銃後の中国社会』

地域エゴの問題や社会秩序の崩壊／大規模な戦時徴発を通じて、保や郷という単位が人々の生活の重要な部分を動かすようになり、これらを通じて人々は次第に国家に結びつけられていくという展望

- ・前著『中華人民共和国成立の社会史』・本書

富裕者への敵意の増大に伴う階級闘争を受け入れる社会的土壌の形成、利害を調整する上位の民意機構の形成の失敗 地域の凝集力が国民意識や公正な負担を保证する法の支配の実現へ結びつかない状況

- ・国民国家統合の基礎の極めて弱い状況 ～急激で過剰な戦時徴発

負担の公平性を求める人々の声が民意機関を動かしていく動き～地域の凝集力を産み出す

- ・各級民意機関の活動：上級機関 省・県参議会において非常に活発

郷鎮民代表会、保民大会は明確に指摘されているのは郷鎮民代表会の一例

このレベルの叙述としては地域エゴの噴出の方が圧倒

～地域の凝集力の向上 主に上級において見られ、基層においては相当な困難を抱えていた

基層における地域の凝集力の弱さ→上意のみに従い一方的な収奪を強化する中共の末端行政機関の形成

- ・日本の地域社会 ムラとムラの関係 ムラにおけるイエ連合の關係の相似形として入れ子型に発展

地域ごとの利害調整に立つ広域的な關係が成立^④

- ・中国 地域のまとまりは下位から順次積み立てられることはなく、

下位の地縁的な組織性が弱い中 権力との關係のつくりやすい条件を整えた上位の行政單位が先行する形で、地域のまとまりをつくる動きをせざるを得なかった？

- ・地域の凝集性が「諸刃の剣」として地域間の対立を深める原因の一つともなつたとされる状況(37頁)

末端の凝集性とされるものの実態：地域エゴのレベル

下から積み上げられず、上位の行政單位で生まれた凝集性が地域間の利害の調整を不能としている？

②公共性を担保する非制度的なネットワークの可能性

- ・日本社会 長期的身分固定 土地緊縛 地域のまとまりが入れ子型に、より上位の地域と権力に接続する^⑤

- ・中国社会 本来地縁よりも人的なネットワークが活発

戸籍・地籍の管理に地縁的結合を利用できず、行政の近代化や戦時動員に困難

- ・内戦最末期の地域の武装化 民意機関の選挙にまで入り込む秘密結社の暗躍

地域のまとまりが成長することなく崩壊 私的ネットワークが再活性化する過程

- ・中共 地縁的凝集性の薄い社会に展開するネットワークを完全に潰す権力を振って、

一旦社会を原子化^⑥、その基礎に立って共和国の激しい収奪を遂行

- ・私的ネットワーク 地縁的凝集性が急速に育たない状況で人々が身を守る最も重要な手段

- ・地縁的結合の発展から国民統合を展望するのみでなく、

私的ネットワークを公的ないし公正な仕組みへと組み替えていく展望は描けないか？

- ・ネットワークの私的性格 非公式の下意上達の「軌道」という近代化を阻害する要因

自発性を基にして融通無碍に広がる互酬性

「管理社会の息苦しさ」とは異なる新たな共同性を生み出す可能性を見出せないか？

^④田原史起「村落自治の構造分析」『中国研究月報』第55巻5号、2001年。

^⑤田原史起前掲論文。

^⑥田原史起『二十世紀中国の革命と農村』、山川出版社、2008年。

- ・天門会(農村結社) 村々の多様な利害をつなぐネットワーク組織
日中戦争期に日本協力政権の武装組織として活動 戦時下の人々の生存の要求に対応、内部に国民政府と中共の幹部・指揮系統を發展させ、戦後の生き残りにも対応^⑦
- ・現代中国 社会関係の「つながり」や「まとまり」による農村ガバナンス^⑧
黄土高原の緑化事業 遠方の人々を結び付ける信仰のネットワーク「開かれた互酬性」^⑨
- ・必ずしも地縁や制度に結びつかない柔軟な人間関係の網
権力とは異なる世界で「したたかに」民衆の生活を繋ぐ
- ・管理社会の呪縛を逃れて主体性を発揮する中国の人間関係の歴史的淵源を
戦時動員による社会変容の中に観察する視点?

【参考】

- ・日本における3つの「市民社会」論^⑩
 - ①「経済社会」 私的利益を追求する資本主義的な市場経済の担い手(bourgeois)
 - ②「公民社会」 近代的諸権利の主体として人倫的理念を追及する存在(citizen)
 - ③「市民的公共性」(ハーバマス) 第三の社会領域 「市民社会(団体)」
自由な意思に基づく非国家的・非経済的な結合関係 民間団体の活動領域
- ・「第三の手」^⑪ 社会の資源配分に関わる「政府の見える手」、「市場の見えざる手」と並ぶ
家族・企業・潜在的ネットワークの倫理規範・ルール

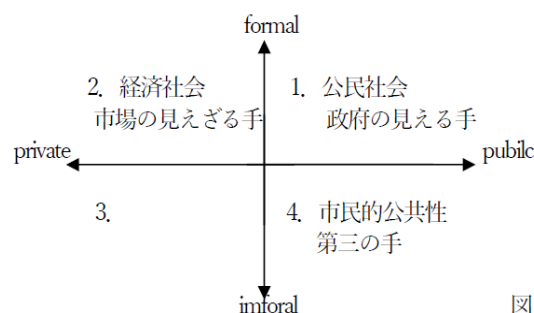


図 市民的公共性と第三の手

③中共政権の性格と構造

- ・社会秩序の崩壊 富裕者に対する敵意の増大 共産党が提示する階級闘争を受け入れる社会土壌が生成
- ・共産党の正当性 既存の権力者を打倒すべき敵として設定する
これと表裏一体で、権力や有力者によって踏みにじられてきた弱者を擁護する姿勢
- ・「人民に奉仕せよ」というスローガン 人民に奉仕するため自己犠牲に徹するという規範
政治闘争を繰り返して、末端で働く幹部は自己犠牲を規範化^⑫、共産党の政権は安定性を確保
中央の政策の調整や転換 大衆に幹部を批判させて責任を転換させる形で可能となる

^⑦ 喬培華『天門会研究』河南人民出版社、1993年、三谷孝『現代中国秘密結社研究』汲古書院、2013年。

^⑧ 田原史起『草の根の中国 村落ガバナンスと資源循環』東京大学出版会、2019年。

^⑨ 深尾葉子『黄砂の越境マネジメント 黄土・植林・援助を問いなおす』大阪大学出版会、2018年。

^⑩ 梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書、2019年、140～162頁。

^⑪ 李培林「另一只看不見の手—社会結構轉型—」『中国社会科学』1992年第5期、同「再論“另一只看不見の手”」『社会科学研究』1995年第1期。

^⑫ 丸田孝志「中華人民共和国成立初期の兵役・革命関係者と農業集団化運動」『史学研究』第315号、2023年。

～権力の正当性は磨滅するどころか、むしろ強化される⁽¹³⁾

④出征兵士家族援護の日中比較

- ・自生的で私的な相互扶助の関係が排除されて、公的な共同作業がシステム化して行く
国際的緊張や戦時動員を背景とした均質なシステム化の貫徹志向という意味で共通性
- ・日本における共同作業 ムラが自生的に持っている公的な機能に依拠しながら実施
- ・中国における共同作業 自生的な地縁のまとまりがないところで遂行
実現可能性や実際の経済的効率性から見ると、後者は農業集団化が生産力を飛躍的に増大させるという
社会主義に対する信奉が力を貸すことによって、現実の根拠の弱さを無視して進展
～よりイデオロギー的 戦時動員を効率的に進めて生産力を上げる政策として評価できない部分

⑤共和国における徴兵動員の超過達成

- ・幹部の強制的な徴発や民衆の様々な抵抗／募集人員を大幅に超える応募が殺到する状況
貧しい生活からの脱却を図る者が積極的に応召
- ・山東省聊城専区 従軍者7千人に対し登録者約9万人
- ・河南省 従軍者7万3千に対し選抜に漏れた者90万2千人余り(238頁)
著者が主旋律として描く、強制手段や様々な動員工作を通じた同調圧力で
社会が締め上げられていくという状況だけでは説明しにくい
- ・1954年 全国徴兵実数83万人余 応募者数12倍の10,032,000人余⁽¹⁴⁾ 華北に限らない全国的な傾向
- ・戦後国共内戦期の中共華北根拠地の冀魯豫区 1947年11～12月の徴兵動員
目標数の6倍以上(2万5千人に対して16万人)の登録を達成
ノルマを定めた地域間の動員競争・利益誘導・家族の動員など様々な手法
この時期、戦局は中共に有利に大きく傾く
幹部の粗暴な動員 大衆運動における階級区分+政治的資格の付与剥奪や政治的区分の流動的な運用
(党員・農会員・積極分子・模範・両面派・悪霸など)
自身や家族の入隊で地位の上昇や身の安全を図ろうとする動機の登録が殺到⁽¹⁵⁾
- ・三品英憲 土地改革運動の深化 貧農であることが権力の正統性に位置づけられていく
運動のやり直しや「行き過ぎ」是正の中で、村落内で恨みを買った人々が報復を恐れ、
貧農の地位の証明のために、従軍に積極的になっていく⁽¹⁶⁾
- ・ノルマの極端な超過達成 ノルマの圧力の下、虚偽報告が横行した大躍進の前哨戦
～この時期の徴兵の構造の解明は、その後の共和国の政治動員を考える上で重要

終わりに

本書 日中戦争から1950年代までの中国の戦時動員体制の確立と社会の変容を一貫した視点で議論
著者が追求してきた世界史的な視点において議論を活性化させることを願う

⁽¹³⁾ 角崎前掲論文、同「『大衆路線』と『抗争政治』—『大飢饉』後における農村統治様式の変容、1960～62年」、国分良成・小嶋華津子編『現代中国政治外交の原点』慶應義塾大学出版会 2013年、陳耀煌「河南の農業合作運動、1949～1962年：兼与Ralph Thaxon, *Catastroph and Contention in Rural China*—書商権」『台湾師大学歴史学報』第56期、2016年。

⁽¹⁴⁾ 「關於中華人民共和國兵役法草案的報告」(1955年7月16日)、彭德懷伝記編写組編『彭德懷軍事文選』中央文献出版社、1988年、521頁。

⁽¹⁵⁾ 丸田孝志「国共内戦期、中国共産党冀魯豫根拠地の参軍運動」『広島東洋史学報』第15・16合併号、2011年、28～35頁、同『革命の儀礼 中国共産党根拠地の政治動員と民俗』汲古書院、2013年、第8章。

⁽¹⁶⁾ 三品英憲『中国革命の方法 共産党はいかにして権力を樹立したか』名古屋大学出版会、2024年、第8章～第12章。

※ 当日使用のものの誤植等を修正している

金子 丸田さん、書評報告有り難うございました。それでは、著者の笹川さんの方からリプライをお願いします。

笹川裕史(以下、笹川) こういう場を設定していただいてありがとうございます。それと丁寧な書評をしていただいた丸田さんにも感謝の意を、まずは伝えたいと思います。ありがとうございます。今のところ、丸田さん以外の基層社会史研究会のメンバーの中から書評が出るという話がありますが、それ以外は全く無視されますので(笑)、非常にありがたく感じております。さて、丸田さんの報告について、一番最後の「若干の疑問点とコメント」に即してちょっと議論をさせていたどうかと思います。

最初にですね、隣に座っておられる奥村さんと一緒に書いた『銃後の中国社会』、この本から一節が引用されていますね。「大規模な戦時徴発を通じて保や郷という単位が人々の生活の重要な部分を動かすようになる」、ここまではそのとおりでと思います。その後、「これらを通じて人々は次第に国家に結び付けられていく」という展望がこの本によって示されている。ここの部分は奥村さんの文章ですね(笑)。もちろん一緒に書いた本ですから僕も責任の一端を負っているのですが(笑)、これは後で奥村さんに議論してもらった方がよいかと思います。

これと絡んで、戦時動員の過程で社会の凝集性が生まれるという論点についてです。それが地域エゴというレベルに止まるのか、それとも地域エゴを調整するような仕組みが整っていくのか、このあたりの議論はとても大切な議論だと思います。ただ聞いていてちょっと気になるのは、地域の個人や末端レベルでの主張や要求の表出が最初から地域エゴであるわけではないんです。ある地域の主張が全体の構造の中で調整の対象となったときに初めてエゴかどうかという意味づけが可能になります。エゴと判定されれば相互の合意に基づいて調整していくことになります。まあ何ていうか、意味づけは状況の変化にともなって変わっていくものなんですね。だから、本源的にこの主張は地域エゴのレベルだとか、そうではないとか、といった形で、二者択一的にとらえられるものではないと思います。こうした意味づけには、当然、国家ないしは行政の論理が介入してきます。

それとの関連で言うと、権力の上の方に位置する省・県参議会などの民意機関には一定の凝集性につながるような調整能力があって、下の方の郷鎮民代表会や保民大会などの民意機関は、生のままの地域エゴにかたくなに寄り添っていて低いレベルにとどまっている、といった議論は成り立たないと思います。要するに、戦時動員に直面する中で、それぞれに非常に切実な主張や要求が地域社会の中に生み出され、それらが下から上へと表出されていく。その過程において、地域の主張は国家の論理を踏まえた「全体性」のなかで相対化されて調整をよぎなくされたり、場合によっては譲歩を強いられたりしていく。そうしたなかで地域社会は国家と協調したり対抗したりしながら、国家とつながっていくわけです。だか

ら省・県レベルと郷鎮・保レベルとの間に、地域の凝集力を生み出すうえで、何か優劣があるかのような捉え方には違和感を感じます。それが一つですね。

それからもう一つはですね、これも戦時動員のなかで地域のまとまりや凝集性が強化されていくという、そういう問題に関わる議論なんですけど、総力戦の下で地域の凝集性が高まるというのは、在来 of 伝統的な紐帯や、宗族とか秘密結社とか、とはちょっと質が違うんですね。総力戦の下で求められるのは、より近代的なっていえばいいんでしょうか、より合理的な組織性なんですね。したがって、丸田さんの場合は、そういう伝統的な紐帯が強化されることによって、そこになにかある種の可能性みたいなものを展望できないかという見解があったと思いますけれども、総力戦が求める社会の変化というのは、私の理解では、在来 of 伝統的な不均質をともなった紐帯を解体していく、そして解体したうえで、総力戦の遂行に都合がいい、いわば近代的・合理的な、そして均質な組織性が求められることになります。それがうまくいくかどうかは別問題ですが、また、それが実現したときに好ましいものになるかどうかはまた別に問題にすべきですが、そのあたりの違いはちょっと区別をされた方がいいのかなと思います。

今度は3番目になりますが。先ほどの2番目に付随する論点です。丸田さんの議論では、今日の中国社会でも見られるような柔軟な私的なネットワークにある種の可能性を見出そうとする提案が登場します。あるいは「自発性を基にして融通無碍に広がる互酬性」などという言葉も使われています。こうしたものに期待を寄せる問題意識はわからないわけじゃありませんが、それが戦時下で育まれていくかということ、そんなことはほぼなくて、むしろ事態は逆の方向に向かっていくと思います。私的なネットワークが育まれていくのは、戦時の論理から離脱することができた「平時」においてだろうと思います。ここで示されている具体例の多くがそうであるように、改革開放政策以降において、中国社会の中で姿を現していく現象じゃないのかなというふうに僕は捉えています。こういう自発的で不均質な組織性みたいなものは、多分、戦時秩序の敵対物だっただろうと思うんですね。むしろ「平時」においてはじめて実現の可能性が開かれていくものだというのが、私のとらえ方です。

それから今度は4番目です。「人民に奉仕せよ」という有名なスローガンに象徴されるような、中国共産党の権力の下で強制された、「自己犠牲に徹するという規範」のとらえ方です。丸田さんによれば、これが権力の正当性が毀損しかねない局面においても、むしろ権力を強化してしまう状況もあったとされています。しかし、僕も言説がもつ重要性を軽視するわけではありませんが、やはりプロパガンダの論理と実際における効果は区別して考えるべきだと思います。僕の場合は、戦時下で犠牲を強いられた人々、特に兵役負担者たちが高度な倫理性を背負わされることによって何を生まれるのか、という問題を取り上げています。帰還

兵でいえば、英雄という表象を背負い、大衆の模範となる振る舞いをするように監視され、極端な労働強化や自己犠牲を強いられる、そうした社会的圧力にさらられて追いつめられ、ときには破滅していく、そうした記録が檔案には多く残されています。この問題は、このような人々の姿を抜きにしては論じられないと僕は思っています。このあたりの問題意識は、丸田さんのこれまでの仕事と対立するというよりも、共通する側面の方が多いと思います。

それから、今度は5番目になります。徴兵ノルマの超過達成をどうみるかという点です。事前に丸田さんからいただいている原稿を見ると、「強制手段や様々な動員工作を通じた同調圧力で社会が締め上げられていくという状況だけでは説明しにくい印象を与える」と、本書のとらえ方を批判し、「共産党政権の安定と動員力の強化によって、極端な兵員登録を実現したと考えることもできる」と書かれています。僕には、この二つの解釈が対立しているようにも思えません。論理的に言えば、「共産党政権の安定と動員力の強化」は、僕にとっては自明の事柄であって、本書はそのうちの「動員力の強化」の具体的な中身を問題にして、同調圧力の技法が洗練されていく様相と、徴兵対象の青年たちを取りまく閉塞状況について史料に即して論じたということです。どこが対立しているのか、私には理解できませんでした。

以上、抽象的な議論ばかりになって分かりにくかったかもしれませんが、差し当たり、このぐらいにしたいと思います。この後の議論の素材にしていただけだと思います。ありがとうございました。

金子 はい、ありがとうございました。もう少し応答の時間が残ってるんですけど、丸田さんの方から今の笹川さんのご発言についてに何か。

丸田 ありがとうございます。最初のところの地域エゴですね。下の方から出てくるのは最初から地域エゴではなくて、調整が必要となった場合に、それが地域エゴになるものであって、下の動きだから、凝集性がないとか、そういう話ではないということだったんですけど、私のイメージとしてあるのは、日本社会のイメージで、それでいくと、入れ子型のコミュニティができていて、その中で近隣の村とかもっと大きなコミュニティの中でも互いに調整が可能な形として積み上げられているという状況があるのに対して、中国ではその状況に達してっていないということかなと。

笹川 まあそういうことですね。ただ、日本の場合は、昔からのムラどうしの軋轢のなかで、ある程度の合意ができて地域社会の調整が図られていく。しかし、中国の場合は日本のムラみみたいな地域を束ねるような存在が前提として希薄なわけですね。そういうなかで、初めて地域が地域として自己主張したときに、近隣の地域から当然「それをやられたら、うちが困るんだ」とか、そういう意見が出てくるのは当然ですね。軋轢を以前から繰り返していた社会では、最初からこま

で主張すると地域エゴになるということは分かっているけれども、そういうことが繰り返されていない組織性が希薄な社会においては、一つの強力な形で特定の地域の利害が押し出されていくと、それが近隣地域に強い反発を生み出していくわけです。そこに、自分たちの地域が不当に不利益を被っているといった不公平感も高まっていきます。そういうなかでこそ、全体の調整が図られる契機が生まれ、社会全体の凝集性が整えられていくようなところにつながっていくんだと思います。だから、地域エゴが低レベルの主張で、エゴを超越したような主張がより高レベルだというような、そういうのが最初からあるわけじゃない。

丸田 要するにだから調整しようとする時にやはり上の方がやりやすい。下は非常に混乱が起こりやすい。そういう状況になっているということだと思うんですよ。

笹川 いや、構造の問題なんです。下は主張するだけでいいんであって、最初からいろんなところに配慮しながらものをいってるわけじゃありませんし、それが求められているわけでもない。戦時下での自分たちの苦境をまずは主張するわけです。それが周りにいろんな反応を引き起こしていったって、それをどうするかというのが、より上層の権力なり民意機関なりの役割であり、責任なんですね。

丸田 だからまあそういった意味でも、より上層の方から現象としては進まざるを得ない。下の方ではまだそのような地域間の調整が生まれない状況があるということではないのかという……。

笹川 あまりうまく伝わってはいないような気がします(笑)……、これぐらいにしておきたいと思います。

丸田 伝わってないですか。すみません。理解できてないでしょうか(笑)。

はい、それから、伝統的な紐帯の話なんですけども、私の中では、平時の話だけではなくて、戦時においても例えば、天門会みたいな組織があったということを描いています。そういったものが、権力の中でどうやって人々の生活を守ろうとしていたという意味で、何かの展望を開けないのかなという意図でした。

それから「人民に奉仕する」については、別にそれが素晴らしい側面だとは全く思っていないくて、メジメの最後のところに書いていますように、下に責任を押し付けるような構造にもなっていて、「人民に奉仕せよ」といって、奉仕できない幹部を叩くという形で、権力の正当性は摩滅しないどころか、むしろ強化されていく。大衆に幹部を批判させることで、権力は責任を取らずに政策を転換することができ、そのような構造が再生産されていく。権力には自己を強化する上では都合のいい側面がある一方で、庶民にとって非常に大変な状況があることは充分理解していて、私もそういう論文を書いているわけです。そういうつもりで、コメントを書いています。

それから、徴兵のことなんですけど、ちょっと私自身十分に詰められていないところがあって、やっぱり志願者と従軍者の数が、あまりにも極端に違い過ぎ

るのですよね。結構この現象というのはやっぱりわからない、というのが素直な感想です。締め上げられているだけではなくて、そこに状況を利用するいろんな人たちが、自分たちの利害によって動いていて、押し出されていくというよりいろんな状況を利用しながら、勝ち馬に乗っていかうとすると人々がいるというところから、見ないといけないんじゃないかなというのはことは、ちょっとと思います。なので、単に動員力が強化されているということだけでなく、何というか、それを利用する極端な動きが一時期起こっているのかなと思ったりもしていて、自分でも十分に整理し切れてないところであります。以上です。

笹川 今の問題については、三品さんもいらっしゃるし、彼の方から結構強い主張もあると思いますので、その時に一緒に議論したいと思います。以上です。

金子 今出た議論では、基層に至る地域社会の階続性も考えながら、凝集性の問題や人的ネットワークなどのあり方についていろいろな意見が出ている、というのが今の学界の現状ではないかという気がします。そうした問題については皆さんもご意見がおありだと思いますので、全体の討論の時に活発にご発言いただけたらと思います。えーそれではですね、今 15 時半を過ぎたところですので、45 分まで休憩ということにいたしましょうか。それから全体討論に移ることにしたいと思います。それでひとまず休憩してください。

(休憩)

金子 先ほど書評者の丸田さんと著者の笹川さんによる議論がありましたけど、続けて何かご発言がございますか。また関連する話が出てきたら改めて議論することによろしいですか。

それでは、どなたからでも結構です。何か話をまとめていこうということではなくて、いろいろな側面から意見を出してもらい、それらが共有されていって一定の歴史認識にたどりつくということになっていけばいいですし、またこの意見が個人的に自分の研究に役に立ったということになってもよいと思います。まあいろいろなレベルで、この書評会で成果が得ることができたらよいと思います。ですから、いろいろと考えていること、思ったことをどんどん出していただけたらと思います。そうしたなかから、恐らく系統的な議論も生まれてくるのでしょうから、積極的なご発言をよろしくお願いします。はい、それではどなたからでも結構ですので、挙手してご意見を。

小野寺史郎(以下、小野寺) じゃあ時間がもったいないので。

金子 はい、ご意見をお願いします。

小野寺 小野寺です。私も最近ちょっとナショナリズムとミリタリズムに関する著書を書いた関係で、その中で中華人民共和国は憲法には義務兵役制を実施すると

書いてあるんだけど、実質的にはその後も志願制を執行したと書いたら、人民解放軍は義務兵役制を実施したという指摘がありまして、それはまさにそのとおりなんですけれども、一方で、その義務兵役制と名がつくものの実際はどうだったのかっていうところが、私がちょっと納得できないところがあります。笹川先生の本の第七章、第八章に記述があるんですけども、あの志願させるという、これは義務兵役なのかっていうところがよくわからないんですね。下層幹部も、そもそもそれまでの志願制とどう違うのか困ったという叙述もありましたし。やはり公平じゃないですよ。結局そうやって志願してるのは、有り体にいうと農民と貧乏人ということになります。それは多分ずっと変わってないというふうに思います。兵役制の利点としていくつか上げられていますけれども、兵役で訓練を受けられる、社会的上昇を得られるっていうのは、上海の人などには関係がないので。そうしたことを考えた時に、この時に行われた兵役制というものを、笹川先生はどのように考えられておられますでしょうか。

笹川 どのように答えましょうか。確かに、制度と実態との乖離という点では指摘されているとおりにですね。義務兵役制といっても、まずは自主的に兵役登録をさせるんです。なるべく強制ではなく、本人が志願したという形にして運営したいのでしょうね。本人が志願するといっても当然その背後には政治力が強力に働いていて、半強制的に登録させています。国家に求められれば徴兵忌避などそもそもありえない、そういう演出を一生懸命やってるわけですね。

ただ、制度的には義務兵役制なので、それ以前と以後とでは違う点があります。たとえば、兵役期間というのは法律で決まっています、かつて日中戦争の時に、拉致同然で戦場に送り込まれた兵士たちは、3年経ったからといって軍隊から解放されることはなかったですね。そういう兵役期間をちゃんと設けている。そして、現役の期間が終了すれば、予備役に編入して、定期的な軍事訓練の義務を課す。また、いざ何か起こったときには、いつでも国家のために命を投げ出して戦場に赴く。そういう点では、一般の志願兵制とは違うんですね。

小野寺さんの疑問に的確に答えたことにならないとは思いますが、50年代初めというのは、かなり法律どおりにやろうとして努力していたことは分かります。これが後の時代になると、だんだん緩んでいって、義務兵役制と志願兵制を併用するような実態になっていくのですが、この本で扱った時期は共産党も法律どおりの義務兵役制をやろうとしていたわけです。以上です。

小野寺 ありがとうございます。

金子 ありがとうございました。どなたか。

三品さん、書評でも名前が上がっていますけど、何かございますか。

三品 はい。ご指名ありがとうございます。和歌山大学の三品です。実は基層社会史研究会の方で笹川さんとはもう既に一度討論しているのですが、今回丸田さんの方から出して頂いた論点で、いくつか私も個人的に気になるところがありましたので、笹川さんのご著書への意見というよりは、先ほどの丸田さんと笹川さんの討論を踏まえて発言させていただければと思います。よろしいでしょうか？

金子 はい、大丈夫です。

三品 ひとつは、丸田さんがレジュメに書かれていた「非制度的なネットワークが公共性を担保するようなものに変化するのではないか」という問題です。この問いに対して笹川さんは、それは総力戦が要求するものを満たすような組織性にはならないと仰ったと思います。私もその意見に賛成です。というのは、丸田さんご自身がレジュメで語られているように、私的ネットワークというのは、地縁的凝集性が急速に育たない状況で人々が身を守る最も重要な手段だと考えます。これに対して総力戦では、住民に本来彼らが望んでいないことをどう強制していくのかという問題が生じます。私的ネットワークに参加している人々は、先に述べた通り自分の身を守るために参加しているわけですから、上から求められた自分たちが望んでいない負担は、そのネットワークに属していない外部の誰かに押しつけるような形でしか処理されないだろうと思います。つまり社会を構成する全員が一つのネットワークに組織されているのでない限りは、私的ネットワークは、そのネットワークから漏れた人、あるいはそこに入っていない人に対して負担を強制していくような、不公平で不均等を助長するようなメカニズムとして働くだろうと思います。したがって私は、総力戦体制は私的ネットワークでは用意できないと考えます。だから共産党も私的ネットワークを徹底的に破壊していくわけです。この点が、お二人の討論を聞いていて考えたことの一つ目でした。

それからもう一つの問題は、徴兵動員の超過達成のところに关わる問題です。私は、プラスのインセンティブで人々に徴兵に応じさせたというよりも、自分の身を周辺の人々から守るために志願せざるを得ない状況が作られたという方を重視しています。では、なぜそんな状況が作り出されたのかというと、共産党はそもそも住民全員を国民として統合しようなどと考えていなかった、そこにポイントがあるのではないかと考えます。国民党はオーソドックスな国民国家の考え方で、すなわち貧富の差、生産手段の所有状況などにこだわらず住民を全て国民として均質に統合しようとしたのに対し、共産党はイデオロギー的に最初から国民を「人民」と「人民の敵」に分け、階級闘争の名の下に後者を打倒することで統合を実現しようとしてしました。しかも「人民」は固定的なものではなく、いつ「人民の敵」とされて「人民」から攻撃されるか分からない。こ

のような不安定で予測不能な状況を作り出すことで共産党は高度な統合を実現したと考えています。そしてこうした統合の構造が、徴兵動員にも影響したのではないのでしょうか。これを国民統合と言ってよいのかどうか、そもそも問題なのではないかと思います。つまり、国民党時代の統合と、共産党・人民共和国の統合は質が違うのではないか。これがお二人の議論を聞いて考えたことの二つ目です。これは質問というよりは感想ですが…。私からは以上です。

金子 ありがとうございました。重大な問題提起だと思いますので、まず丸田さんの方から発言いただき、それからそれに対して笹川さんの方からも応答していただきたいと思います。

丸田 私も笹川さんや三品さんのおっしゃることは、確かに理解できます。確かに総力戦の中では、やっぱり私的なネットワークに属するの形の、こういった非制度的なものは動員の力にはならないし、不公正になるというところで……。確かにちょっと私の方の視点とは微妙にズレているなあと……。社会の中でどうやって人間が生きていて、人々がより幸せになるためにはどのように国家の統制から逃れられるのか、というところに重点があったと思うんですね、で、そういったところで、笹川さんの言われるような管理社会の息苦しさから逃れて、自分がこの戦争の中で人間らしく生きるやり方として、こんなネットワークもあるだろうという、そういった意味になっちゃうんですね。そうすると、戦時動員という課題から外れてしまう、ちょっと視点が違ってしまっているので、ちょっと問題提起の仕方としては、立場が違うというか、見方が違ってしまったと思います。やっぱり、管理社会の息苦しさというのはどうすればいいのかっていう話、そういうところのコメントという気持ちがありました。でも、それは総力戦体制が切れたところじゃなくて、具体的にちょっと説明しにくいですけども、戦時期にも天門会みたいな生き方ですね、これもこれでありなのかな、そんな感じなんですね。戦時下において戦時動員とは異なる形で、社会と権力がうまくあの渡り合いながら、一方的に収奪されない状況を作ることもあるが、それは、ちょっと近代的な仕組みをつくるには難しい。すみません。ちょっとぐるぐるしてしました。ありがとうございました。

金子 今のお話は、戦時下という条件での動員とか統合において、そこで生きていく人間のまとまり方、あるいはまとめ方というものをどのように考えるかという問題になるのだらうと思うんですけど……。笹川さん何か？

笹川 僕が言いたかったことを、三品さんがより分かりやすく話してくれたように思います。戦時動員と、国家の権力が及ばないような緩衝空間というのは、並存できないのではないのでしょうか、原理的に。総力戦は、そういう空間をできる限り縮小させ、究極的には消し去っていくような形で押し出されていくものだと考えます。

だから、これも繰り返しになって恐縮ですが、丸田さんのいう、国家の権力が及ばない私的なネットワーク空間の中に、ある種の可能性みたいなものを見出そうってというような議論が成り立つとしたら、むしろ戦時の圧力が緩和された時代において初めてそういうことがいえるんじゃないでしょうか。

もちろん、戦時下であっても権力が及ばない非公式の空間が実態として存在するでしょうけど、それが表に出てくれば、総力戦を遂行している国家はそれを公的に認めることは絶対にしない。それを放置したり、緩やかにそのままにしておくという余裕が国家の側に生まれるのは、やはり戦争が終わった後、「平時」の体制に戻ったときであって、中国でいうと、やはり改革开放政策以降なんだと基本的には考えています。そのときは、本書の表題に出てくる「戦時秩序」が換骨奪胎に向かう、そういう時期です。以上です。

金子 司会の方から恐縮ですが、丸田さんの報告の最後の 8 頁に当たるところで、「同調圧力で社会が締め上げられていく」という箇所ですね、最初の質疑のなかで議論になったことだと思うんですが、丸田さんは同調圧力にもう抗しきれず動員されていくというのではなくて、その圧力をしたたかに利用しながら自分の利益を見出していく、というところにも注目する必要があるんじゃないかという議論をされたのかなと思ったんですけど、その点いかがですか。

丸田 はい、その締めるだけでは理解しにくいような動員力というか、人々が群がってくるような動き、ちょっとそこところが疑問であったということです。やっぱり同調圧力とか、あるいは締め上げる原理以外のものがあるんだろうと。それをステップボードのように利用するような人々がいたんじゃないかというような理解です。それはえ内戦期の、私が研究したところでもそんなふうに見えるということです。

笹川 戻っていいですか。ちょっと僕がすごく誤解を招くような話をしたのかもしれませんが、そのあたり、実は丸田さんと同じ見解が一致しているところもあります。この本の中で、たとえば、「軍隊に入営していると、こんないいことがあるんだよ」とか、「社会的に上昇していけるんだよ」とか、あるいは在地社会で不利な状況に置かれていてその状況から抜け出すために軍隊に入っていくという、そういう形で従軍して行く人たちがたくさんいたわけです。それはこの本の中でも繰り返し描いたつもりですし、全然否定してるわけじゃない。だから、全部が全部、同調圧力で締め上げられて従軍していくみたいなイメージを、この本で打ち出したわけではないことはきちんと理解して欲しい。

丸田 そのあたりをもっとなんでかなと、そこをもうちょっと何か展開できれば面白かったですね。

笹川 そのところは、三品さんが議論を全面展開してくれるといいんですけど。

金子 えーっと、では振られている三品さん。

三品 私はプラスのインセンティブではなく、もっと個々人にとって厳しいメカニズムが働いたという方で説明したいと思っています。

金子 今回の議論について何か意見などないでしょうか。毎回研究会で言うのですが、院生の皆さんも大人しく聞いてるだけじゃなくて、積極的に議論に参加してもらいたいと思います。……はい、それではお願いします。

傅子晟(以下、傅) ご著書を拝読してなくて、申し訳ありませんが、一つ非常に浅薄な議論かと思いますが、お伺いしたいことがございます。日中戦争期から朝鮮戦争期に関するご説明は、四川省に関する議論が多いのですが、なぜ四川省を中心に説明しているのでしょうか。やはり人口の面でしょうか。あるいは食糧生産の大きさからでしょうか。

笹川 日中戦争期になると、四川省というのは戦時首都重慶のお膝元で、食糧の徴発にしても、兵士の動員にしても、最もたくさんの資源を収奪された地域なんです。そういう意味で、日中戦争を四川省だけで語るわけにはいかないけれども、四川省がある種の典型性を示している地域である。いいかえれば、いわば日中戦争という時代を象徴するような側面をもった地域の一つが四川省なんだと考えています。

しかも、この点は、日中戦争時期だけでとどまりません。たとえば、食糧の徴発についていえば、人民共和国建国当初の 1950 年代に、中国各地の食糧不足地域に大量に移出された国内産食糧のうち 1/3 ぐらいが四川省から持ち出されていました。そういう意味で、四川省は同時代の中国が抱える問題を考えるうえで、事例研究としては適切な地域かなと考えています。

ただ、当然起こってくる疑問だろうと思いますけど、一つの地域を捉えて、それを中国全体に押し広げる、その一地域だけで中国全体をくくれるかという疑問は、残念ながら、ついてまわります。たとえば、食糧負担とか、あるいは兵士動員の負担にしても、負担の軽かった地域では違った現象が実はあったはずだ、そこを視野に収めながら、全体像を描かなければならないというような正論を、誰かがすれば、「そのとおりでございます」と(笑)、答えるしかありません。とはいえ、まずは一番典型的で、問題が如実に示されている地域を選び出して、何が起こっていたのかを明らかにすべきだと考えています。そういう方法論に立っているということです。よろしいでしょうか。

傅 はい、ありがとうございました。

金子 はい、ありがとうございます。

三品 この問題に関連して、よろしいでしょうか。この本の一つの特徴として、地図がないという点が挙げられると思います。本書は四川省を取り上げていて、議論の中では非常に細かい地名が出てくるのですが、でも地図が一枚も掲載されていません。四川省の地図どころか中国全体の地図もありません。これは意図的にそ

うされたのか、費用的な問題などからそうせざるを得なかったのか。意図的である場合は、その意図についてお聞かせいただければと思います。

笹川 そうですね。丸田さんのレジュメを見ると学術的啓蒙書ということで、奥村さんとの共著で出した『銃後の中国社会』、それから単著の『中華人民共和国誕生の社会史』の二点を挙げてもらってるんですけど、ここには中国全土の地図も、それから四川省の地図も、分かりやすくして掲げています。出版社にも協力を求めながら、それなりの時間と工夫を重ねて作業しました。だから、正直に言うと、もう同じ作業をやりたくないみたいな意識もありました。読者に対しては、実に不誠実で不遜な態度ですね。褒められたものではありません。

それと同時に、一方で、地域史で凝り固まろうという姿勢は、あまり僕は好きではないということもあります。「私はなんとか省をやってます、私はなんとか省に関する何々という本を出しました」、みたいなスタイルだと、中国全体が後景に退いてしまいます。そうではなくて、研究の方法としては、まず私たちとは異なった個性をもった中国という国家や社会の特質について興味をもち、それを深く考察してみたい、それを考察するうえで、中国のこの地域、この現象について詳しく取り上げることが、こういう意味で有効な手がかりとなる、といった順序で研究を組み立てることが望ましいと考えています。最初から「中国のこの地域のことだけしかやってません。中国全体については私のフィールドではないので語りません」、みたいな禁欲的な姿勢は、学問的には謙虚で真つ当なのかもしれませんが、しかし、それでは、情報量は断片的に積み上がっていきませんが、日本の中国研究はむしろ全体として質的に痩せ細っていくような気がします。

老人の躁り言みたいになりますが、我々の世代からすると、やはり中国を知りたい、中国の近現代史を全体として知りたいという強い意欲があって、そこから始まってなかなか全体を語れないなか、差し当たりは地域を、その当時を象徴的に代表できるような地域を、という形で選んできました。要するに、地域史それ自体に価値を見出し、そこにとどまろうとする積極的な動機が、僕には希薄だったんですね。以上のような研究の現状に対する不満も、どこかで絡んでいたことを付け加えておきます。以上です。

金子 ありがとうございます。よろしいですか。なかなか熱く語り始めておられるので(笑)……。他にどなたかご意見ありますかね……。

あの先ほど三品さんが全体に関わる議論を提起してくれたんですけど、もう一点ほど国民党と共産党はそもそも国民を統合する考え方が違うんじゃないか、質が違うんじゃないかというようなご発言がありました。この点について、笹川さんの方で自分の研究に即して考えると、どんなことが言えるのか、そのあたりについてご意見をいただきたいと思いますが、いかがですか。

笹川 たぶんそのとおりだろうと思うんですけども、ただ共産党が権力を握った後も、確かに地主や富農は、そもそも義務兵役制の対象から外します。そういう意味では、国民すべてを念頭に置いた兵士動員ではないといわれれば、そのとおりです。しかし、彼らはごく一部の例外的な人たちなんですね。たとえば、国民党だって犯罪者はやはり除外して兵士を徴発していくわけです。だから、共産党が国民全体ではなくて国民の一部だけをターゲットにした動員をやっていると、そういう理念でものごとを進めているということではありません。そういうふうの一部の例外だけに注目して極端に考えていくと、少し間違ったイメージを作ってしまうんじゃないか。あるいは、当時の 50 年代の共産党による国民統合の努力を軽く見る間違いを起こすんじゃないか、と感じます。彼らは、国民の中のできるだけ多くの人々を動員の対象として包摂しようと苦勞しています。そういう姿が当時の文献を見ると、浮かび上がってきます。全般的な印象としては、そんな感じがします。以上です。

金子 三品さん、何か？

三品 何度も同じような発言をすることになってすみません。共産党は「地主」「富農」というレッテルを貼った人に対しては、公民権を与えないという形で二等国民扱いしました。最終的には彼らを包摂しようと努力していたのは分かりますが、でも包摂されるには彼らが「人民になった」という証しがなければならなかった。具体的にはそれは「何年間労働に従事した」ということになりますが、それでも何か事が起こるたびに彼らは「黒五類」などの形で排除され肅清対象にされることになります。つまり国家の編成原理としては、領域内に住んでいる、あるいは国籍を持っているからといって、全員を国民として等しく扱おうというつもりは、そもそもなかったのではないかと考えられます。そしてその体制は、毛沢東が死んで社会主義体制が解除されていく、すなわち総力戦体制が解除されていく過程でようやく転換され、住民全てを国民として扱うようになっていった。このような捉え方もできるのではないかと思います。

笹川 いまの議論で思い出したんですけど、国民党も厳密に言えば国民すべてを統治対象としてはいませんね。たしか、国民党の訓政綱領には三民主義に賛成している者だけを国民と認定するという一文が入っていたと思います。こういうことを問題にしていくと、国民党の場合も、国民全体ではなく、その一部のみを選別して、彼ら以外を「国民」として認定しないという理念をもっていたことになります。もちろん、強度や実質は違いますけれども、同じ一党独裁国家として、類似した要素を帯びていたのではないのでしょうか。

丸田 三品さんの言われるようにやっぱり革命政党というのは、革命の目的のためにあらかじめ敵を作って、その中で敵味方の範囲を定めて、その範囲を伸縮させたりしながら運動の力に利用するところがあって、全体的に革命政党には敵

が必要であり、国民統合を最初から目標とするより敵を打倒する目標に向かって統合力を高めていくというところがあると思います。

笹川 あの金子さんも発言したいんじゃないですか(笑)。

金子 そうですね。訓政の段階は今まで指摘されたことは妥当だと思いますが、国民党はその後憲政に移行するんですよね。憲政に移行した時には、やはり国民統合は憲法規定に基づいてやっていこうとしたと思います。そのあたりのことを共産党が現在どう考えているのか分からないんですけど、国民党と共産党の少し違うところかなという気がします。ただし、訓政の時は革命政党としての統合を考えていて、丸田さんがいわれたように敵を作ってこれを排除しながら、それを契機として国民の一体感を高めていくという、うまくいったかどうか別にして、そういう考え方では二つの政党は一致してるところがあるんじゃないのかと思います。

えっと何か他に意見……、なかったらちょっとせっかくご指名いただいたので、私の方からも少し議論を。三品さんの議論に触発されたところがあるんですけど、議論を聞いて思い出したのは多分『戦時秩序に巣喰う「声」』を出した時ですか、民国史研究会かどこかの研究会が書評会を開いて下さって、笹川さんも参加されていたと思います。その時に、確か久保亨さんだったと記憶しているのですが、結局この国民党、共産党の社会掌握のやり方っていうのは近代的といえるんですかと質問されたのです。社会を把握して行くっていうのは近代的なんだというふうに単純に思っていたので、そう言われれば確かにそうだなというところがあったんですね。

それで、今日の議論の中でも「近代化」という言葉が出てきて、そこで厳密な社会の掌握というのが要件として上がっている。あるいは総力戦が求めるものについても、「近代的、合理的、均質な組織性」を求めるという表現を使ってお話しされています。例えば私も、都市の上海で同業団体を対象に社会把握について似たような研究をやってるんですけど、国民党の場合は徴税する時にどうするかというと、徴税の源泉、要するに経営内容を計算可能な形で正確に把握しようとして、環境・条件的に無理であっても執拗にやろうとする。戦後の内戦下でもやろうしますところが、共産党は個々生身の人間を直接に把握してこうとする、把握することによって税を徴収しようとする。このように、徴税のあり方で違いがあるわけです。それから、笹川さんの論文の中でも出てくる「民主評議」でも、共産党は都市における徴税で直接同業団体の中に入り込んで評議結果を操作しようとする、つまり社会の内側に入って把握してやろうとするのです。これに対して、戦後の国民党も「簡化稽徴」という形で民主評議と同じようなことやるのですが、しかし共産党と違うのは、法律と制度によって外側から把握しようとするわけです。この違いっていうのは、徴税(35:37)であるからなのか。しかし、

徴兵であるとか糧食調達だとかについては、ご著書を読ませてもらっていると国民党と共産党は同じようなことやってると感じるわけです。それらの手法も、「近代的」という言葉を使うべきなのかどうなのか分からないですけど、社会掌握における国民党と共産党の差異、あるいは同一性について、笹川さんは今どのようにイメージしておられるのか、聞かせていただけたら有り難いのですが……。

笹川 難しい質問ですね(笑)。私もよくわかりません。ただ、曖昧ないい方で恐縮ですが、広い意味で「近代的」といういい方でひっくるめてもいいんじゃないでしょうか、国民党・共産党の両方とも。

もちろん、確かに細かくみていくと違いはあります。いま徴税の例を出されたので、徴兵の方についていうと、やはり共産党は社会の内部に手を突っ込んで兵士を選択していくわけです。「民主評議」とか、まさにそうですね。要するに徴税との類似でいうと、徴兵の場合も、徴兵対象者の名簿を作り、その名簿に基づいて、法律を盾にして機械的に嫌がっている人でも捕まえていけばいいわけですが、共産党はそういうことは避けようとする。むしろ、「民主評議」という、村人みんなが参加するような大会を開いて、そこで従軍するのが望ましいと共産党が考える青年を執拗に説得しようとする。いろいろと理由をつけて、たとえば、お前の家族には男の子が何人いて、労働力に余裕があるからお前の家族から出すべきだとか、そういう実質に踏み込んで人を選定・動員していきます。単に名簿だけをみて、条件を満たしているからと機械的に選び出し、本人がどんな特殊な事情を抱えていようが、どんなに嫌がっていようが関係なく捕まえて行かせるというやり方とは違います。このあたりは、金子さんがいわれたこととよく似た側面があるような気がします。

金子 私のイメージとして、国民党の社会把握力、掌握能力というのは近代的な志向をもっており、徴税でも帳簿を根拠とした計算可能な、平時ではそれが当然とされる把握の仕方を戦後内戦下でも何とか維持しようとするんですね。税源である商工業者や社会の実態を見ずに。これは、共産党が社会を実態を見て、その内側に入り込んでいくというのと大きい違いがあるのかなって気がします。そのため、やはり共産党の方が社会把握能力ということで、一枚上手な感じがするのですが、そう判断してよいのかよく分からなくなる点もあります。例えば、国民党が日中戦争下や戦後内戦下で社会が動揺する中で、商工業者の登記を実施するのですが、なかなかうまく進展しない。ところが、共産党は1949年以降50年くらいまでに上海であつという間にやっちゃうんですね。その違いをどう理解するか。国民党も、もし戦時体制下でなく社会状況が変われば、共産党と同じように商工業者登記を順調に出来ていたのか。それとも、やはり社会把握の能力と手法が違うから、状況・環境に関係なく共産党は登記をスピーディにできちゃうのか。そのあたりの問題を、どのように考えたらいいいのかよく分からないのですね。

笹川 あまり深く考えているわけではありませんが、今の金子さんの議論を聞いた感想としては、あれかこれかではなく、やはり両方だと思うんですね。それぞれの政党が持っている固有の個性と、そういうことをやらざるをえない当時の時代状況——国際環境も含めて——、それらが二重に作用して、社会掌握力の差が生み出されているんだと考えるのが一番いいのかなと思います。

金子 はい、ありがとうございました。司会がでしゃばる形で意見を述べさせてもらったのですが、関連したことでもいいし、全然別のことでも構いません。他にどなたか。じゃあ徐君。

徐茂嘉(以下、徐) 広島大の徐です。恥ずかしながら、ご著書をまだ拝読していませんが、第一第四章で言及されていて、丸田先生のコメントにも指摘された、社会に対する収奪力について、どれほど戦時の社会変容、すなわち社会の崩壊、地域のまとまりの崩壊につながっていると考えられますか。やはり極限的な収奪力は、共産党またはレーニンリズムの政党の本質的なことというか、少なくとも共産党政権の特徴の一つだと思いますし、比較的、社会が崩壊していない中東欧の共産党国家において、大躍進のような過酷な政策は行っていないけど、共産党政権の安定に伴い、社会に対する収奪力が著しく成長していたと思います。社会が崩壊していたかどうかに関わらず、政治が安定すると、共産党政権は社会に対して強力な収奪力を確立できるように見えます。以上です。

笹川 今の件ですが、食糧についてはきちんと数字が出ています。たとえば、第二章では日中戦争期の国民政府の努力を描いていて、最終的には憲兵などを動員した強権的な手法が「最後の砦」だったという指摘をしますけれども、しかし、1949年以降の食糧の徴発量と比較すると、日中戦争期には国家が社会の隅々まで掌握したとはとてもいえません。外見上は強権的であっても、その内実、つまり社会の掌握能力はなお貧弱であったわけです。

数字を見てみましょう。日中戦争期の年平均徴発量を基準とすると、共産党政権にとってから農業税および計画買い付けで農村から引き出した食糧の量というのは、その4.3倍から5.4倍になります。国家の収奪能力には格段の違いが存在することははっきりしています。だから、日中戦争期にはどんなに強権的な手段をとっていても、社会の側には権力が及ばない隙間がいっぱいあったということです。その隙間を共産党は一つ一つ潰していった、食糧を最大限に徴発できる体制を整えていったわけです。

本書では触れていませんが、日本の場合と比較すると、とても興味深い事実が浮かび上がります。日本の場合は緻密なデータが残っていて、戦時中日本が国内の農村から供出させた米の量は、生産量の六割ほどなんです。日本のムラ社会がこうした供出を請け負い、その組織力によって各農家の供出を末端できめ細かく調整・監視し、国家の需要に応えていたわけです（「部落責任供出制度」）。日本

の農家は、多分ギリギリの線で供出負担に耐えていたのだと思います。中国の場合、共産党による農業税と計画買い付けをプラスした供出量は、僕の推計ですけど、やはり全生産量の6割近いという数字が出てきます。大ざっぱな数字ですが、これが実態に近い数字であれば、奇しくも、50年代の共産党の食糧徴発能力は、日本の戦時下の食糧徴発能力とほぼ肩を並べるレベルに達しているということになります。このぐらいでよろしいですか。

徐 ありがとうございます。

金子 それでは、次に手を上げておられる奥村さん。

奥村哲(以下、奥村) 話したいことがたくさんありますけど、先ほどのところで丸田さんの、地域エゴのことかな、上からはわりと凝集力が生まれて、末端では地域エゴの状態じゃないかという話がありましたよね。そこで『銃後の中国社会』の僕の書いた部分を引用されていますけれども、ちょっと僕の理解と違うんじゃないかな。どう違うのかはもうちょっと後の方でお話しします。もうひとつは、僕は笹川さんとは言わば同じ穴の貉なんですけど、今回本を読んでみて、あれっと思うところがあって、それは初めの方で、8頁です。それは先ほどから議論になっていることと関係していて、日中戦争によって中国は全社会の掌握が必要になってくるんですね。4行目なんですけど、「中国の場合、この課題を首尾よく実現するには、末端行政による社会の掌握力を強化すると同時に、社会それ自体の自律的な組織性を向上させる必要があった」と書かれています。僕はここになぜ自律的という言葉をつけるのか、そこに疑問があるんですね。そこはかなり大きな問題があるんじゃないのかな。というのは、個々バラバラでは、上からの収奪や徴発はやっぱ弱いんですよね。だから末端の方は組織しなければいけない。問題はその組織が自律的であるかどうかです。自律的だとその組織が反抗する場合もありうるわけだから、そうじゃなくて、まずはそれを国家が把握できるかどうか。そういう問題だろうと思うんです。自律的であるかどうかということは、僕は国民党のやり方と共産党のやり方の違いがそのへんにあるのだろうと思います。

先ほどの丸田さんの書評のⅢのところですね。『銃後の中国社会』においては、「大規模な戦時徴発を通じて保や郷という単位が人々の生活の重要な部分を動かすようになり、保や郷を通じて人々は次第に国家に結び付けられていくことになった」。保や郷を通じて人々は国家に結び付けられていくとは言ってるけれども、凝集とは言ってないですね。要するにまず、保の段階ではですよ、自分は保の民だという意識は元々はあまりない。保というのは上からの枠組みだから。ところが大規模な徴発が上から降りてきて、その時に保によって食糧とかあるいは兵士が出されるという事態が生じる。そこでいやおうなしに保という枠組みを意識せざるを得ないことになるし、それをやってるのが国家だということになる。

そういうふうには国家との間に関係がやむなく生じてしまい、その中でともかく考え、行動せざるを得ない状況が作られた。でそれがさらに拡大していったら、保の上にある郷という枠組みにだんだんなっていくが、当初は保という単位でやっていかざるを得ない。だから長い目で見れば、結局国家が郷や保を通して人々を国民として組織していく、ということなんですよ。だからここでは保の中の凝集ということではないんです。

最初の話に戻りますけど、自律的な組織性を向上させる必要があるというのは、僕はそうではないと思います。自律的であるかどうかというのは重要な問題なんだけど、戦争を続けるためには、とにかく組織を国家が掌握するというのが必要です。でそれをどうやって掌握するか。一番望ましいのは自律的に下が組織されて、それを上の方でうまく掌握して行くことだろう。おそらく国民党も社会をすぐに掌握する力がないから、それをやっぱり望んでたんだと思うんですね。で先ほどの議論から言えば、訓政というのは教育期間なんですよ。上から教育して、地方自治をやらせて、それを積み上げた上で憲政をやる。確かそういう感じですよ。だから国民党の場合は、上からの教育とかそういうのを通じて、自律的という言葉を使わなくても、やっぱりある程度まあ自律的になることを想定している。でそれに対して共産党の場合はそうじゃないと思うんですね。これはもう自律ではなくて、もういきなりとにかく無理やりでも把握しようとする。その場合にも、問題になってくるのが組織化なんですよ。じゃあ、それはなんで可能になるのか。バラバラの中で。簡単に言えばむしろ逆説的なんだけど、分断することで社会を把握する。「敵か味方か」のどっちかを選択するしかないという状況に追い込む。これ分断ですよ。社会のね。先ほど人民ということが言われたけれども、人民か人民の敵なのか、まずそれを設定させて、お前はどっちを選ぶんだという形でやってから、多数となるはずの者を「人民」としてを組織する。短期間で組織するには、一番有効な方法だと思います。一旦分断を持ち込むのですが、ただし問題はそれができる状態でなければならない。それがやはり戦時の極限状況だと。えっと喋り出すとキリがないので一旦この辺で。

笹川　今の議論、反論した方がいいのでしょうか？

金子　共産党にとって自律的な組織性は必要ないんだという点について……。

奥村　自律的というのはいらない。ただ、国民党と共産党では、国民党の場合はあった方がよかったかもしれないが、それはすぐにはできない。

金子　共産党の方は運動をやるので自律性は必要はない？

奥村　そもそも国民国家の国民を形成する場合に、上からの統合と下からの統合とがやっぱりある。だけど急激に政治変動が起こった時に、急激に統合をやらないうけない時に、下から自律的にというのはやっぱり駄目なんですよ。共産党

の場合、急激な統合が可能なのは敵か味方かという分断、さらにいえばその理論的な根拠として階級闘争論があるんですよね。

金子 戦時体制、戦時秩序の下では、共産党にとっては……。

奥村 そうそう、戦時体制の下で共産党は。

金子 共産党にとっては、自律的な凝集性を作り上げるのではなく、上から掌握していく、それが重要だと、そういう論点ですね。

奥村 だから歴史上の大きな「もし」なんですね。「もし」は歴史ではあんまりやっちゃいけないっていうんですけど、日本が侵略しなかったら、国民党の下でまあ時間はかかったろうけれども、だんだん下からの社会のまあいわば建設的な構造というものが作られていったのではないかと。これは反実仮想ということですけども。現実ではそうならなかったんですけども。論理の上ではそう考えられる。

笹川 ちょっといろいろと議論が錯綜してきましたが、僕の責任で答えておかないといけないのは、「自律的」という言葉を使った点ですね。ただ、奥村さんの議論を聞いていると、とらえ方がそれほどかけ離れているというわけではありません。

確かに当初は上から作り上げていかないといけないという側面があると思いますが、僕の念頭にあるのは、やはり日本社会なんですね。日本社会、特にムラ社会の持っている自律性、これが日本の戦時体制を末端で支えていたわけです。要するに、国家があれこれムラの中に手を突っ込まなくても、ムラが国家の方針を承認すれば、ムラ自体の持っている「自律的な組織性」によって、国家が求める食糧もきちんと供出されていく。たとえば、ムラ内部で米を出したくても出せないような農家が出てくれば、相互に支援をしたり、あるいは国家の供出割り当てに不可避免的にともなう実質的な不平等があれば、それをムラ社会が丁寧に調整したりしています。

そこには、戦時体制の末端における「受け皿」として、ある種の完成された姿、いわば最も望ましい姿が観察できます。国家がいちいちムラ内部に手を突っ込まなくても、ムラという団体がムラ人をきちんと掌握し、物的資源も人的資源も責任をもって提供していくわけです。

他方、そうした条件がない中国のような社会では、様々な深刻な問題が頻繁に発生します。本書で「自律的な組織性」という言葉を使用したのは、今話したように、戦時体制を十全に機能させた日本のムラ社会のイメージが念頭にあったからです。奥村さんがいうように、「自律性」がそんな簡単に、すぐに育まれるわけではなく、そのためには長期にわたる取り組みも必要でしょう。したがって、当面は上からの強制力に依存したり、意図的に作り出した「分断」を利用したりするほかない。とはいえ、当面はそうだとしても、戦時体制を効率よく、混乱な

く持続的に機能させる要件としては、やはり「自律性」は外すわけにはいかないと考えています。

金子 はいじゃあ、そのほかに誰かご意見があれば。

水羽信男(以下、水羽) 今言われた議論を聞きながら、最初に丸田さんが言われたことと絡んでくるような気もしました。凝集性がどう生まれるかっていう話をされた時に、笹川さんが言われて、非常に印象が強かったのは、まず地域で最初は自分たちのやまれぬ思いを主張していくことから始まる。それを地域エゴというふうに捉えたらおかしい、ということです。その声が調節され始めるのが第一歩で、結局はいろいろなやり取りの中で調整されていくかもしれないし、されないかもしれないけど、まずはその声を一等下とか見ちゃいかんと笹川さんは言われて、そういう議論を聞いていくとやっぱり凝集性ってのはどうやって生まれていくのか、その凝集性を保証する制度もあるんだろうと思うし、そのあたりの問題について、丸田さんと笹川さんとの間に理解のずれがあるのかなという印象が僕にはあります。そのへんのことについて、少しお2人の考えを聞いてみたい。

また僕がよく分からないのは、共産党っていうのは自律的な社会ができるのはいやなのか。自律性が生まれるような芽は摘んでいくのが共産党の政策という理解になるのか……。

奥村 問題はそのあたりですね。共和国が成立した後に、教育とかやっていきますよね。まったく自律的ではないけれども、教育水準とか上げていって、国家があるというのを気が付かせる。こういうのはやっぱり大事ですが、完全に自律的であるっていうのは、共産党は否定している。

水羽 これは三品さんの議論とも関わると思うんですけども、やっぱり対立を無限に作り出して、共産党に認められないと生きてゆけないような状況を作り出して、共産党を支持させていく。そういう意味で凝集性はできるけど、結局それは本当に自律性といったものではないんだ、という理解があるような気がする。そういう理解に対してどう考えるべきなのか、という論点もある気がします。ただこれは奥村さんの見解への話なので、凝集性の作られ方について、お2人の考えを聞かせていただければと思います。

金子 お互いの理解がズレれてますし、難しいと思うんですけど(笑)。もう一度そのズレ、つまり凝集性についてどういうふうに考えるか、という点をもう少し話していただきたいと思います。

笹川 それについては、丸田さんと議論して、それぞれのイメージは提示しあったと思っているんですけどね(笑)。丸田さんもそれなりに理解してくれたし、もう一度繰り返す必要はないように思うんですけど(笑)……。

それでも、あえて繰り返すと、地域エゴの問題でいうと、社会の最末端あるいは個人のレベルでは、最初は自らの事情を訴え、自己主張するしかないわけです。

そこからしか話は始まらない。「こんなに困ってるから何とかしてほしい」というような形で自己主張が始まり、次の段階で、それが周囲との交渉や軋轢の中で、地域エゴと判断されたり、修正や譲歩を強いられたりしていく。そういう過程のなかで、地域社会のまとまりとか凝集性みたいなものが育まれていく。みんながそれぞれ言いたい放題で、バラバラで自己主張しているだけでは凝集性は生まれませんね。しかし、それぞれが自己主張していると、お互いに交渉し始める。「お前たちがそれを主張するのはよくわかるけれども、そんなことやられたらうちの地域が困るんだ」みたいな、そういう声がお互いに絡まり合っていく。そういうなかで、一番妥当な選択は何かとか、妥当な結論は何かとかいうような形で、ある種の一定の凝集性が生まれてくるんだろうというのが僕のイメージです。

水羽 だから、笹川さんは中国の地域における凝集性の形成の可能性を否定しないし、その可能性は実際に中国の歴史の過程で見れたんだということになるんだと思うんです。そのへんが、丸田さんの理解だと、あくまで地域で最初に出てくる声っていうものは、むき出しの欲望なので、そういうものがいくらく繰り返し出てきたところで、社会の凝集性というのはできないというのが、丸田さんの理解ではないかなと、そういう気がして聞いていたんだけど、そうではないの？

丸田 えっと、私は笹川さんの指摘された事実をまとめると、こういうことではないですか、としか言っていない感じですね。それが別のことを明確化したとか、中国はあのままだったとか、そういうのはあんまりなかったんですけども。結局下の凝集性はまだ備わっていない段階で、凝集性がむしろ上級機関、県の参議会ですね、こういったところで意見をバンバンあげるような形で、やっぱり権力とつながりながら権力を共有できる、そういった一定の知識、資源を備えて情報を持っている人達が立ち上がってなんとかしようと、そういった凝集性を持つ。こちらの方が早い。それで、下の方では、まだとまどまっっていて、あのとりあえずエゴでしかないけれども、まあなんとかしてくれというところがあって、それは長い目でいったらそういう凝集性につながるかどうかわからない部分もあったけれど、実際には笹川さんはこれは地域エゴだという形で指摘されていて、実際に地域の凝集性として活動しているものは、鎮や郷やその下のレベルでは一つの事例しかなかった。それでいくと、その時期にはなっていないのではないかと。なので、やはり中国においては、凝集性はまず上の方からできるのではないかと。実質的には農村から始まって下から上に積み上がるという形にはなっていないのではないかと、まあそのぐらいの理解なんですよ。

笹川 一例しかないと言われたけど、郷とか保レベルの主張はいっぱい檔案に出きますよね。それはたぶん本書に盛り込まれているはずですよ。

丸田 だから、郷鎮民大会、保民大会という形で代議機関として主張しているという話です。それ以外は、基本的に笹川さんは、いろんな形で声が上がってくること

を指摘されているけれど、基本的に地域エゴの性質として捉えられているんですよね。すみません。読み違いかもしれません。

笹川 自己主張が生のまままでとどまっていれば、エゴとして処理されてしまう。

丸田 基本的に地域エゴとして描いていて、だから民意機関が立ち上がってくるんですね。各級民意機関として立ち上がる、地域にまとまりが出てくるのは、ご著書で例示されているのは、郷鎮以下レベルの民間機関の例は一例しかなかった。だから、他のところでいろんな動きがあるけれども、それは民意機関としての動きの話ではないのですね。地域の凝集性という形で民意機関が生まれてくるのは、省・県が基本になると……。

金子 かなり難しい問題だと思うんですけど、凝集性というものがどういう形で現われるのかっていうことは、制度的に考えると、地域の行為・共通利害が出てくるためには、どういう手続きが必要なのかという議論が必要になります。また、行為・利害を制度的に表出していくのではなく、非制度的にも、こうワースと集まって訴えるっていうことがあるかもしれないですね。そういう手段の違いと凝集性の問題とをどう結びつけて考えるのか、というところから議論していかなくちゃいけないのではないのでしょうか。つまり、凝集性一般という問題から、地域の利害が制度的ないし非制度的に、いかなる手段で表出されるのか、それが地域の凝集性といかに関わるのか、そのへんの議論が必要になってくるんだろうと思います……。すみません。途中で議論を切るような形になりましたが。

ええと、まだ時間が若干ございますが、丸田さんの書評に関わらせて何か他にご意見などないでしょうか。ないようでしたら、楊先生から笹川さんの著書に対して何かご意見があれば、頂戴したいと思います。

楊奎松(通訳 周俊) 実のところ、今日、私はこの本に関してコメントする資格がないと思います。まず、この本を読んでないということがありまして、実際は丸田先生の書評を読んで笹川先生の本の内容を理解したんですけど、今日の皆さんの議論を聞いて、丸田先生の笹川先生の本に対する解釈が結構議論になっていることに気づきました。それで、丸田先生の書評だけで笹川先生の本の評論をすることも、あまりよろしくないと思います。幸いなことに笹川先生の本の後ろに中国語の目次がついていますので、先ほどの皆さんの議論と結び付けて、笹川先生の本の研究の枠組みについて、私の印象を簡単に述べたいと思います。

まず、笹川先生の本のタイトルにある「中国戦時秩序」についてですか、時間の設定に多少疑問があります。本書で触れられている「戦時秩序」の期間に関わる事件の名称をざっと見てみますと、笹川先生がいう「戦時秩序」の期間設定は、20 世紀の 30 年代から 50 年代と思われます。本の中では朝鮮戦争や大躍進まで触れられています。もし、共産党中国の 50 年代の大躍進も「戦時秩序」の範疇に入るとすれば、60 年代初期の大飢饉とそれへの対応、60 年代中期の「戦争準

備と飢饉への備え(備戦、備荒)」の「三線建設」、1970年代前後のソ連の侵入と中共指導者、北京の重要機関・学校・研究所などの大規模な疎開、全国範囲での「深く防空壕を掘り、広く食糧を備蓄する(深挖洞、広積糧)」運動も戦時秩序の範疇に入れることができます。

1949年以降の毛沢東の統治思想と戦略は、革命時代の経路依存性を脱していませんでした。しかし1949年の建国後、毛沢東は必ずしも全てを指導していたのではなく、戦時秩序も直線的な発展を遂げたわけではありません。例えば、建国初期の数年間、毛沢東が好むと好まざるとにかかわらず、まだ多様な所有制経済が存在していました。また、大躍進の失敗の後、毛沢東は経済調整と休養に同意せざるを得ませんでした。つまり、一国の統治は戦時中とは異なるのです。毛沢東は確かに戦役ごとに目標を推進しようとしたが、実際には前進と後退を繰り返しており、常に戦時中の緊張状態を維持できるわけではありませんでした。

私はこの本を読んでいないので、具体的な内容はよくわかりませんが、目次を読む限り、笹川先生が国民党と共産党の「戦時秩序」を比較したことに賛同します。両者の社会動員の効果について、国民党が全体的に共産党に劣っていた重要な要因は、私有財産権に対する理解の本質的な違いにあると思います。率直に言って、私有財産権が概念的にも法的にも神聖で不可侵なものとして認められている限り、政府が社会を完全に統制したり、いわゆる総動員体制を実施したりすることは非常に困難です。いったん私有財産権への侵害が許されれば、権力者は社会からあらゆる資源を望むように汲み上げることができるようになります。

これに関連して、本書のもうひとつの重要なテーマである、「総力戦」の問題の考察と叙述にも関心があります。もし、戦争中に法律が権威を保ち、私有財産の権利を保護することができるならば、どの国も本当の意味での「総力戦」を行うことはできません。しかし、ひとたび為政者が「民族」や「国家」の利益、あるいは「主義」や「信仰」を法の上に置き、個人の生命や財産を全体の利益に従属するものとみなすようになれば、「総力戦」の名の下での戦争、殺戮、収奪…、さらには「教義」や「信仰」によって生まれる人道上的災難は容易に立て続けに引き起こされるでしょう。

金子 はい、ありがとうございました。時間が押してきていますが、笹川さんの方から今の楊先生のご質問に対して意見をいただけたらと思います。

笹川 何て言うのかな。全部はちょっと答えられないと思います。

本書で議論している「戦時秩序」という概念は、かなり独自な使用の仕方をしていきます。まず、戦時体制との違いでいうと、戦時体制というのはシステム、つまり権力の編成の問題なんですね。しかし、その編成の下で社会が徐々に戦争に適

応できるような秩序を自ら作っていく。逆に、国家が戦時体制を構築しても、民間では「戦時秩序」が作れないということも現実には起こりえる。他方、戦争が終わって国家が戦時体制を解体しても、「戦時秩序」が執拗に生き残っていくということもある。民間の中で一つの社会秩序として存続していく。

こうした観点で中国をとらえた時に、僕は日中戦争から「戦時秩序」の形成が始まって、50年代以降に至っても継続していると考えます。たとえ、1953年に朝鮮戦争が停戦を迎えても、中国には「戦時秩序」が残り続けて、今日の中国社会に独特の影を落としていく。その「戦時秩序」が最終的に解体に向かうのが、改革開放政策の開始です。しかし、「戦時秩序」のある側面は今日の中国においても引きずっているというように捉えています。

だから、先生の考えておられる総力戦だとか、戦時体制だとかといった概念とは相当に違う議論を本書ではしています。おそらく、一般的には先生の方がオーソドックスな議論なんだろうと思います。それと比べれば、本書の場合、かなり個性的で、人文科学や社会科学の知的背景が異なる中国の先生方にはすぐには受け入れられない議論かもしれません。違和感は強いかもしれませんが、互いの違いを認め合う寛容な姿勢で、少しでも受け止めていただければ幸いです。

金子 簡潔にまとめていただき有り難うございます。残念ながら予定していた時間になりました。この後、懇親会も予定されていますので、そこで議論を継続していただければと思います。本日は、活発な議論を有り難うございました。